

高校生用日本語能力テストの開発

一(2) 漢字読み取りテストの項目分析と誤答パターンについて(要約)一

平 直樹・小野 博・林部 英雄

帰国子女が日本国内の学校教育機関へ編入する場合、様々な不適応要因を抱えるケースが多い。そして、不適応要因となり得る問題の一つに日本語能力の遅れが挙げられる。

この問題に対処するため、帰国子女の日本語能力を簡便に測定する目的のテストが開発中である(小野他, 1989; 平他, 1992)。特に、高校生以上の水準においては、語彙能力と漢字の読み取り能力を測定する項目の開発が試みられているが、本研究は高校生用漢字読み取りテストの項目の一部を作成するのが目的である。

まず、中学生用の60項目を含む、計140項目から成るテストが作成された。中学生の項目を含めたのは、将来的に連続した一つの尺度として編成するためである。

調査は、全国28の高等学校の計約18,000名(分析に用いたデータは12,000名余り)の生徒を対象として行われた。これらの被験者は語彙テスト

の調査対象(平他, 1992)と同一の者である。

テストの得点率は、平均63.16%、標準偏差19.11%であり、全体として高校生段階の標準的なテストの作成に成功したと考えられる。また、項目分析の結果、140項目126項目がテスト項目として良好であると判断された。

語彙テストの結果と比較したところ、両者の結果に密接な相関関係があることが分かった。また、テストの特性としては、漢字テストの方が得点のちらばりが大きく、識別力が大きい結果となった。

また、誤答のパターンについて分析したところ、項目の統計的性質との関係が見られ、誤答の中で代表的なものは、内容的にも類型化できることが分かった。

今後、これらの成果を生かして項目を増やすとともに、帰国子女の日本語能力の研究に実質的に役立つテストの完成を目指していく。